『長崎国際大学論叢』 第14巻　2014年３月　13頁～20頁

原著論文

英語の医学用語の語形成に及ぼすラテン語の影響について

平　井　美津子
（長崎国際大学 人間社会学部 国際観光学科）

Latin Influences on the Word Formation of English Medical Terms

Mitsuko HIRAI
（Dept. of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies,
Nagasaki International University）

Abstract

In the history of the English language, there were four time periods when English was greatly influenced by Latin. This is especially true during the early modern English period when a great number of words including technical terms were introduced directly from Latin. In this paper, I focused on the adjective forms of technical terms, particularly medical terms in English, and investigated their etymology and the year in which they appeared in English for the first time. As a result, I found out that about 85% of total words（476 adjectives）was derived from Latin. In contrast, 10 adjectives were inherited from Old English which originated from Proto-Germanic, and were formed by adding the suffix “-y”（OE: -iȝ, -ig）to the noun form.

Key words

Latin, suffix, adjective, Old English, Middle English, modern English Proto-Germanic

要　旨

英語は、歴史上主に４回ラテン語と接触し、多くのラテン語が流入した。その中でも近代英語前期には、学術用語をはじめとして極めて多くのラテン語が英語に流入した。今回、英語の学術用語、特に医学用語の形容詞形に注目し、その語源と英語での初出年を調査し分析した。その結果、ラテン語由来の形容詞形は85%近くを占めることがわかった。一方、ゲルマン祖語に由来する古英語を語源とする形容詞形は10例で、いずれも接尾辞 -y が添加されたものであった。

キーワード

ラテン語、接尾辞、形容詞、古英語、中英語、近代英語、ゲルマン祖語

１．はじめに

荒木ら（1982）によると、英語の場合には本来語、つまりゲルマン語系は15-25%、ラテン語系が約50%、ギリシャ語系が約10%で、残りの15-25%は他の言語からであり、混合語彙となっている[1)]。英語史的にみて、古英語（OE）では接辞が充実し、一つの語根からさまざまな派生語を生み出してきた。そのためOE期（450-1100年頃）の語彙は外来語の比率が低かった。しかし、中英語（ME）期（1100-1500年頃）にはラテン語やフランス語、古典ギリシャ語から多数の語が流入した。特に15世紀頃から、例えばnervous（L：*nervosus*）のように、接辞がついた形のものも流入したことから、英語の接辞による造語能力が低下していった[2)]。

医学の祖であるヒポクラテスは古代ギリシャ

の医師であったことから、医学分野の語彙の多くは、古典ギリシャ語に由来する。ローマ帝国の繁栄に伴って、多くのギリシャ語の医学用語は、ローマ字化され、ラテン語に継承されていった[3)]。特に医学の分野では、新しい語や専門用語、さらにはその形容詞形を英語で作るのではなく、直接ラテン語やフランス語、古典ギリシャ語から借用し、英語化していった。しかし、流入した学術用語は難解で、多くは途中で消滅していった[4)]。このような中、現在も生き続けている学術用語にはどのようなものがあるのか、またそれらの形容詞形はどのような語形成を経て現在に至ったのかを解明しようと考えた。

そこで今回は、学術用語、主に医学分野で用いられる英語の形容詞形で、特に日本語の「～の」「～に関する」「～的な」「～性の」といった性質や状態、属性、関係を表す形容詞に着目し、その名詞形と共に初出年と語源を調べ、さらに形容詞形がどのような語形成の過程をたどったのかを分析した。そしてその結果から、ラテン語由来の形容詞が医学分野の学術用語の中で、どの程度の割合を占めているのかを示した。

2．英語とラテン語の接触の歴史

本論に入る前に、英語とラテン語の接触の歴史について概説する[5)6)7)8)]。

ラテン語が英語に流入する前のイギリス本土には、紀元前からケルト人が住みケルト語を話していた。しかし4世紀末から始まったゲルマン人の大移動の中で、5世紀、現在のドイツ北部に居住していたゲルマン人がイギリス本土を占領し、ケルト人を北部に追いやった。その時に彼らが持ち込んだ言葉が、今の英語の祖先である。英語史ではこの時代の英語を古英語（Old English）と呼ぶ。スペリングも発音も文法も現在の英語と異なり、ドイツ語に近かった。

過去、英語へのラテン語の流入は18世紀までに4回にわたって行なわれた。最も古くは、ゲルマン人がローマ人と接触していた頃に取り入れられたものである。4世紀頃にはローマ帝国に数百万人のゲルマン人が居住していたといわれ、彼らは *strata*（＝street）、*vallum*（＝wall）、*vinum*（＝wine）、*caseus*（＝cheese）など、生活にとって重要なものや農業、戦争関連のラテン語を多く取り入れた。

第2期は、597年イギリスにキリスト教がもたらされた時期である。そのため *angelus*（＝angel）、*candela*（＝candle）、*schola*（＝school）、*papa*（＝pope）など、主に教会に関わる語が流入した。

第3期はノルマン王朝のイギリス征服（1066年）に伴うものである。ノルマン人の言語、ノルマン・フランス語が公用語となり、宮廷や議会、学校などで用いられるようになった。一方、英語は庶民階級の言葉となり、学者や聖職者は書き言葉としてラテン語を使用した。しかし1337～1453年に起こったフランスとの百年戦争の中、イギリスにおけるフランス語は公用語としての地位を失い、英語が再び公用語として復活した。しかし、英語に不足していた語彙を、当時文化水準が高かったフランス語やラテン語から積極的に借用した。これらの語彙は、法学、医学、神学、科学、文学に関連する多くの学術用語やさらには *-alis*（＝-al）、*-osus*（＝-ous）、*-icus*（＝-ic）、*-ivus*（＝-ive）、*-icalis*（＝-ical）、*-aris*（＝-ar）、*-inus*（＝-ine）、*-arius*（＝-ary）などの接尾辞のついたものなど多岐にわたった。この時期は ME 期に当たる。

第4期はルネサンス期（14～16世紀）である。ルネサンス期は古典研究の復活期で、古典ギリシャ語のみならず、B.C.75～A.D.175年頃に用いられていた古典ラテン語をあらゆる分野で用いるべきだという主張がなされたことから、16世紀半ばを中心に約1万語のラテン語が書物を通して英語に入ってきた。特に、科学や哲学などの難解なラテン語が多く流入した。例えば *anatomia*（＝anatomy）、*capsula*（＝capsule）、*pneumonia*（＝pneumonia）、*parasitus*（＝parasite）、*insomnia*（＝insomnia）などである。さらに、本来、名詞からの派生で造られる形容詞

が、ラテン語から直接流入し、それが英語化したことにより、例えば本来語 eye の形容詞形がラテン語 ocular（L: *ocularis*）に、fatherly と同じ意味のラテン語 paternal（L: *paternalis*）というように、本来語の名詞や形容詞と対をなし、文体上の対立がしばしば生まれることになった。

近代英語期（1700〜1900年）、1700年代には英語の規範文法が確立し、1721年には本格的な英語の辞書が編纂されたことから、英語はラテン語や古典ギリシャ語から借用することなく学術用語を造ることができる言語として成熟した。しかし、その語源の多くは古典ギリシャ語・ラテン語由来であることは事実である。

3．学術用語の形容詞形の語源と成り立ち

前述したように、第 3 〜 4 期にかけて、ラテン語、フランス語、古典ギリシャ語が多量に流入し、名詞形のみならず形容詞形も直接英語に流入したという事実に注目した。

そこで今回、学術用語の中でも、特に医学分野で用いられる形容詞形を取り上げた。まず、ステッドマン医学大辞典を中心に、ラテン語あるいは古典ギリシャ語由来であると考えられる医学英単語を洗い出した。そして Oxford English Dictionary（OED）とランダムハウス英和大辞典でラテン語・古典ギリシャ語由来であるかどうかを確認し、該当する場合、語源と初出年を調査した。同時に、その名詞に形容詞形があるかどうかも調べた上で、該当した場合は、その語形成がどのようになされているのかを分析した。ただし、古典ギリシャ語の接尾辞に「病態」を表す -osis（ωσις）の形容詞形 -otic（ωτικός）がある。18〜19世紀には、cirrhosis や psychosis、necrosis など -osis を用いた英語の病態名が多く作られ、それに伴い、-otic を用いた形容詞形も造られた。今回の調査ではこの形式のものは除外した。

さらに 2 章で示した第 4 期で、本来、名詞からの派生で造られる形容詞が、ラテン語から直接流入したことにより、本来語の名詞や形容詞と対をなし、文体上の対立がしばしば生まれたことから、対立例も同時に調べた。

4．英語に流入した形容詞形の分類および分析

今回見出された形容詞形は、全部で476語であった。その分類を表 1 に示す。

圧倒的にラテン語由来のものが多く、②③④を合わせると全体の83.8%（399 / 476）を占めた。ここでまず、ラテン語由来の形容詞形についてそれぞれを詳しく見てみる。

表 1　形容詞形の分類

	分　　類	例数	割合
英語系	①古英語や中英語から現代英語になった例	13例	2.7%
ラテン語系	②ラテン語の形容詞形が直接英語に導入された例	228例	47.9%
	③ラテン語の名詞に英語の接尾辞が添加された例	34例	7.1%
	④ラテン語の名詞が英語化し、その後英語の接尾辞が添加された例	137例	28.8%
古典ギリシャ語系	⑤古典ギリシャ語の形容詞形が直接英語に導入された例	17例	3.6%
	⑥古典ギリシャ語の名詞に英語の接尾辞が添加された例	14例	2.9%
	⑦古典ギリシャ語の名詞が英語化し、その後英語の接尾辞が添加された例	13例	2.7%
その他	⑧ラテン語・ギリシャ語以外の言語、特にフランス語が直接英語に導入された例	11例	2.3%
	⑨英語化した形容詞にさらに英語の接尾辞が添加された例	8 例	1.7%
	⑩その他分類されないもの	1 例	0.2%

②のラテン語の形容詞形が直接英語に導入された例として、abdominal（腹部の）を取り上げる。Abdominal の直接の語源となるのはラテン語 *abdominalis* である。この *abdominalis* がそのまま英語に流入し、1746年 abdominal として英語化した。その初出例を⑴に示す[9]。

⑴　The perpetual Compressure of the Stomach, and all the abdominal Viscera.

その他②に分類されるものとして　academic、analytic、artificial など228例がある。

次に③のラテン語の名詞に英語の接尾辞が添加された例として、aural（耳の）を取り上げる。この aural の語源となるのはラテン語の名詞 *auris*（耳）である。*Auris* 自身は英語化しなかったにもかかわらず、英語の接尾辞 -al が添加され aural として1847年に英語化した。その初出例を⑵に示す[10]。

⑵　Acting on the aural nerve.

その他③に分類されるものとして　gigantic、mammary、laryngeal など34例がある。

最後に④のラテン語の名詞が英語化し、その後英語の接尾辞が添加された例として　atomic（原子の）を取り上げる。この atomic の語源となるのはラテン語 *atomus* である。*Atomus* は ME で attomos、その後 atom として英語化し、それに英語の接尾辞 -ic が添加され atomic として1692年英語化した。その初出例を⑶に示す[11]。

⑶　According to their hypothesis…this atomick bustle was from eternity.

その他④に分類されるものとして anemic、basic、clinical など137例がある。

一方、古典ギリシャ語由来の形容詞形は9.2%（44 / 476）に過ぎないが、多くのラテン語の名詞、特に medical Latin は古典ギリシャ語を語源としていることは、言語学上明白なことである[3]。

ここで⑤〜⑦を少し詳しく見てみる。

⑤の古典ギリシャ語の形容詞形が直接英語に導入された例として、古典ギリシャ語 *dialytikos* を語源とし、1846年英語に導入された dialytic[12]（透析の）や *diagnostikos* を語源として1625年英語に導入された diagnostic[13]（診察の）など17例が見出された。

⑥の古典ギリシャ語の名詞に英語の接尾辞が添加された例として、古典ギリシャ語 *automaton* を語源とし、それに英語の接尾辞 -ic が添加され、1812年英語に導入された automatic[14]（自動的な）や *gaster* を語源とし、英語の接尾辞 -ic が添加され、1656年英語に導入された gastric[15]（胃の）など14例が見出された。

⑦の古典ギリシャ語の名詞が英語化し、その後英語の接尾辞が添加された例として、古典ギリシャ語 *amnion* を語源とし、17世紀に amnion（羊膜）として英語化し、そこに英語の接尾辞 -otic　が添加され、1863年英語に導入された amniotic[16]（羊膜の）や *hormon*（動かすこと）を語源とし、1905年に hormone（ホルモン）として英語化し、そこに英語の接尾辞 -ic が添加され、1914年英語に導入された hormonic[17]（ホルモンの）など13例が見出された。

次に、①古英語や中英語から現代英語になった例について分析した。①に分類されたのは、13例であった。具体的に言えば、achy、bloody、bony、breathy、cancerous、chilly、dizzy、drowsy、feverish、feverous、headachy、itchy、sleepy である。このうち bloody は、ゲルマン祖語 blodam から OE に blod として入った名詞形 blood に、ゲルマン祖語から OE に入り、-iȝ、-ig として存在した接尾辞 -y がついた本来語である[18][19]。1000年頃に英語に導入された。その初出例を⑷に示す[18]。

⑷　Dissenteria, blodiȝ utsiht.

その他 bony[20)21)]、chilly[22)23)]、itchy[24)25)]、sleepy[26)27)]も同様である。

Dizzy はゲルマン祖語から OE に入った英語の本来語である。ただし、825年頃 dysiȝ としてまず“foolish, stupid”の意味で現れ、900年頃に名詞形 dysiȝnesse が造られ、その後1340年頃に「めまいがする」という意味に拡大した特殊な例である[28)29)]。また drowsy は1530年に初出したが、語源となる drusan は OE から存在した。1559年 drowsy から名詞形 drowsiness が造られた本来語である[30)31)]。

一方、headachy に関して言えば、名詞形の headache は、ゲルマン祖語を語源とするOE の heafod（＝head）と æce（＝ache）から造られたものである[32)33)]。但し headachy は“of or pertaining to headache”を表す形容詞形でなく、少し派生した意味の“suffering from headache”を表している。ちなみに“of or pertaining to headache”の意味を表すものはラテン語を語源とする cephalalgic である。その他 achy[34)] や breathy[35)] も同様である。

Feverish、feverous の語源をさらに調べると、OE で fefor として現れていた fever の語源は、ラテン語の *febris* である[36)]。また cancerous の語源となる cancer は OE で既に英語に存在していたが、その語源は、古典ギリシャ語 *karkinos* からラテン語 *cancer* である。この cancer について OED で次のように記述されている[37)]：The word was adopted in OE. as *cancer, cancor* for the disease, reinforced after 1100 by the Norman French *cancre*, which gave the ME. and modern canker.

以上より、問題なく①に分類されるのは、いずれもゲルマン祖語から OE に -iȝ、-ig として存在する接尾辞 -y がついたものである。しかし今回、注釈が必要な語もあるが、OE から英語の中で育まれた英語として上記の13語を①に分類した。

最後に少数例である⑧～⑩について少し詳しく見てみる。

⑧のラテン語・古典ギリシャ語以外の言語、特にフランス語が直接英語に導入された例として、biliary（胆汁の）がある。Biliary の語源はフランス語 *biliaire* であるが、ラテン語 *biliaris* からとの記述もある[38)]。2章で示した第4期には、英語のみならずフランス語においても、多くのラテン語が流入した。この時代に借用された単語は、直接ラテン語から取り入れられたものか、または間接的にフランス語を経由したものであるかは必ずしも断言できない[39)]。このことから、今回フランス語からの導入例は11例となったが、間接的なものを考慮すると、フランス語からの流入もかなりの数にのぼるものと考えられる。

⑨の英語化した形容詞にさらに英語の接尾辞が添加された例に分類されたものは8例であった。具体的にいうと、ammoniacal、anaphorical、electrical、empirical、hypnotical、mechanical、technical、theoretical である。例えば、hypnotical（催眠の）であるが、語源は古典ギリシャ語 *hypnotikos* で、ラテン語 *hypnoticus* 経由で流入し、1625年 hypnotic として英語化した。その後1657年に hypnotic に接尾辞 -al が添加されて hypnotical となった。両者の初出例を⑸に示す[40)]。

⑸ ① Not neglecting <u>hypnoticke</u>, cardiall, and deoppilatiue medicines.

② Their similitude to <u>Hypnoticall</u> medicaments.

⑩のその他分類されないものに arsenic がある。現代英語で「ヒ素の」という意味を表す形容詞に arsenic と arsenical がある。両者の語源はラテン語 *arsenicum* である[41)]。この *arsenicum* は ME で arsenicum さらに arsenic（ヒ素）として英語化した。当初 arsenic は名詞であったが、1801年から形容詞の意味も表すようになった。一方、arsenical は、ラテン語 *arsenicum* に英語の接尾辞 -al が添加され、1605年英語に導

入された形容詞形である[42]。

5．対立例について

前述したように、ルネサンス期にはラテン語が多量に英語に流入したことにより、本来語の名詞や形容詞と対をなし、文体上の対立がしばしば起こった。今回の調査で形容詞形に対する名詞形も調べていく中で、98語の対立例を見出すことができた。例えば、ocular である。本来語 eye が既に存在するのにも関わらず、ラテン語 *oculus*（目）、さらにその形容詞形 *ocularis*（目の）が英語に流入し、1597年 ocular として英語化した。つまり、現代英語では eye の形容詞形は ocular である。この ocular の初出例を⑹に示す[43]。

⑹　The Eye, or <u>ocullare</u> vayne.

このように、eye 以外にも belly、ear、kidney、liver など、特に基本語において多くの対立例が認められた。表 2 に時代毎の対立例を示した。

表 2　年代毎の対立例

時　代	本来語（英語）	対立例
14世紀前半 (1300–1349)	tima（＝time）	temporal
14世紀後半 (1350–1399)	bodiȝ（＝body） dæg（＝day） wifman（＝woman） man deað（＝death） rot（＝root） sed（＝seed） life will	corporal diurnal feminine masculine mortal radical semen, seminal vital voluntary
15世紀前半 (1400–1449)	side hand mynd（＝mind） ege（＝eye） womb	lateral manual mental optic uterus, uterine
15世紀後半 (1450–1499)	moder（＝mother）， modorlic（＝motherly） niht（＝night） sunna（＝sun） slæp（＝sleep）	maternal nocturnal solar somnolent
16世紀前半 (1500–1549)	eare（＝ear） bæc（＝back） sed（＝seed） tima（＝time） nafela（＝navel）	auricle, auricular dorsal sperm, spermatic temporary umbilicus, umbilical
16世紀後半 (1550–1599)	earm（＝arm） heafod（＝head） skinn（＝skin） toþ（＝tooth） lifer（＝liver） guttas（＝gut） hnecca（＝neck）， þrote（＝throat） lippa（＝lip） ege（＝eye） æg（＝egg） bacbon（＝backbone）	branchium branchial cephalic cutaneous dental hepatic intestine, intestinal jugular labium, labial ocular ovum, oval spine, spinal
17世紀前半 (1600–1649)	ceace（＝cheek） docga（＝dog） heorte（＝heart） tima（＝time） rib blædre（＝bladder） winter slæp（＝sleep） moon mus（＝mouse） muþ（＝mouth） fæder（＝father）， fæderlic（＝fatherly） apa（＝ape） dysiȝnesse（＝dizziness） glæs（＝glass）	buccal canine cardiac chronic costa, costal cystic hibernal hypnotic lunar murine oral paternal simian vertigo, vertiginous vitreous
17世紀後半 (1650–1699)	tægl（＝tail） buel（＝bowel） hnecca（＝neck） eyelid bodiȝ（＝body） fefor（＝fever） catte（＝cat） foreheafod（＝forehead） stomak（＝stomach） goma（＝gum） tunge（＝tongue） breost（＝breast） mearh（＝marrow） nosu（＝nose） eare（＝ear） nyppell（＝nipple） swine（＝pig）， pigge（＝pig） lungen（＝lung） kidenei（＝kidney）	caudal celiac cervical cilium, ciliary corpuscle, corpuscular febrile feline front, frontal gastric gingiva, gingival lingual mammary medulla, medullar nasal otic papilla, papillary porcine pneumonic renal

	cest（＝chest）	thorax, thoracic
18世紀前半 (1700-1749)	belly ege（＝eye） lungen（＝lung）	abdomen, abdominal ophthalmic pulmonary
18世紀後半 (1750-1799)	hors（＝horse） þeoh（＝thigh） meoluc（＝milk） þrote（＝throat） æppel（＝apple） ban（＝bone） braeþ（＝breath） bodiȝ（＝body） blædre（＝bladder）	equine femoral lactic larynx, laryngeal malic osseous respiratory somatic vesica, vesical
19世紀前半 (1800-1849)	eare（＝ear） oxa（＝ox), bula（＝bull） brægen（＝brain） collarbone scolle（＝skull） brægen（＝brain） golet（＝gullet） tear pimple purple apa（＝ape）	aural bovine cerebrum, cerebral clavicle, clavicular cranium, cranial encephalon, encephalic esophagus, esophageal lachrymal papula, papular purpura, purpuric simial
19世紀後半 (1850-1899)	brid（＝bird） guttas（＝gut） brycge（＝bridge） coughen（＝cough）	avian enteric pons, pontine tussive

6．おわりに

15世紀後半から19世紀に多くのラテン語、フランス語、古典ギリシャ語が流入したことは、英語史上重要な事実である。今回見出された医学用語の形容詞形は、ラテン語由来のものが85%近くを占めることがわかった。一方、OEから名詞形が存在し、英語の接辞がついた医学用語の形容詞形は13語で、そのうち形容詞あるいは名詞がゲルマン祖語を語源とし、OEに入ったと認められるものは10語であった。いずれも共通して言えることは、OE から存在する接尾辞 -y がついたものである。

ラテン語の名詞形が英語化した場合、語形成の観点から言えば、名詞に接尾辞が添加され、形容詞形が造られるのが一般的である。しかし実際には、それに相当するラテン語の形容詞形が直接英語に流入し、英語化した例が、今回の調査で半数近くにみられた。これは、英語の医学用語の形容詞形は、英語の中で造るというよりむしろ、ラテン語に大きく依存していたことが推測される。

荒木ら（1982）によれば、政治的・文化的に支配されている人々が、支配階級や、自分達より高い文化を持つ人々にあこがれる場合に威信借用が起こり、必要な語句は自国語に備わっているのにもかかわらず、威信があるとされる言語から借用し、それによって自らの威信を高めようとする[44)]。今回の調査で、医学領域でのラテン語由来の形容詞形が8割強を占めていることが見出されたが、これは当時、医学の世界ではラテン語が圧倒的な影響力をもっていたということを言語学的に裏付ける結果になったと考えられる。さらに、eye と ocular、heart と cardiac、kidney と renal、liver と hepatic など、人体の部分においても多くの対立例を見出すことができた。このことからも、英語圏で医学の威信を高めようとする当時のアカデミックな人々の思惑が見え隠れするのは興味深い。しかし、1900年以降の対立例を見出すことができなかったことから、英語での医学が確立し威信を高める必要がなくなったものと推測される。

今回、語形成の分析と並行して、副産物として多くの対立例を見出すことができた。さらに一般的な語彙を調査し、これらを違った側面から分析することで、そこからまた新たな見解が生まれる可能性があり、今後の課題としたい。

参考文献

1）荒木 一雄，太田 朗他（1982）『新英語学辞典』研究社，1297頁.

2）Baugh, A. C.（著）(1978) *A history of the English language*＝永嶋大典他訳（1989)『英語史』研究社，222-226頁.

3）二宮陸雄（1986)『これだけは知っておきたい医学ラテン語』講談社, 1-16頁.

4）中尾俊夫，寺島廸子（1989）『図説英語史入門』大修館書店，137-140頁.
5）前掲書２）93-99，224-226，276-291頁.
6）前掲書４）163-167，189-192頁.
7）中尾俊夫（1989）『英語の歴史』講談社，77-81頁.
8）Bragg, M.（著）(2003) *The Adventure of English* ＝三川基好訳（2008）『英語の冒険』講談社，181-193頁.
9）Simpson, J. A. et al.（1998）*The Oxford English Dictionary,* 2nd ed., Oxford University Press. P.18（Volume Ⅰ）.
10）前掲書９）P.788（Volume Ⅰ）.
11）前掲書９）PP.751-752（Volume Ⅰ）.
12）前掲書９）PP.602-603（Volume Ⅳ）.
13）前掲書９）P.596（Volume Ⅳ）.
14）前掲書９）P.805（Volume Ⅰ）.
15）前掲書９）P.390（Volume Ⅵ）.
16）前掲書９）PP.406-407（Volume Ⅰ）.
17）前掲書９）PP.385-386（Volume Ⅶ）.
18）前掲書９）P.302, 308（Volume Ⅱ）.
19）Online Etymology Dictionary 'blood' 〈http://www.etymonline.com/index.php〉[2013, December 10]
20）前掲書９）P.383, 390（Volume 4 Ⅱ）.
21）Online Etymology Dictionary 'bone' 〈http://www.etymonline.com/index.php〉[2013, December 10]
22）前掲書９）PP.118-119（Volume Ⅲ）.
23）Online Etymology Dictionary 'chill' 〈http://www.etymonline.com/index.php〉[2013, December 10]
24）前掲書19）PP.145-146（Volume Ⅷ）.
25）Online Etymology Dictionary 'itch' 〈http://www.etymonline.com/index.php〉[2013, December 10]
26）前掲書９）PP.684, 677（Volume Ⅹ）.
27）Online Etymology Dictionary 'sleep' 〈http://www.etymonline.com/index.php〉[2013, December 10]
28）前掲書９）P.901（Volume Ⅳ）.
29）Online Etymology Dictionary 'dizzy' 〈http://www.etymonline.com/index.php〉[2013, December 10]
30）前掲書９）P.1078（Volume Ⅳ）.
31）Online Etymology Dictionary 'drowsy' 〈http://www.etymonline.com/index.php〉[2013, December 10]
32）前掲書９）PP.44-45（Volume Ⅶ）
33）Online Etymology Dictionary 'headache' 〈http://www.etymonline.com/index.php〉[2013, December 10]
34）前掲書９）P.101, 104（Volume Ⅰ）.
35）前掲書９）P.520, 523（Volume Ⅱ）.
36）前掲書９）P.862（Volume Ⅴ）.
37）前掲書９）P.823（Volume Ⅱ）.
38）前掲書９）P.189（Volume Ⅱ）.
39）前掲書２）281-282頁.
40）前掲書９）P.568（Volume Ⅶ）.
41）大槻真一郎（2006）『語源辞典　ラテン語篇』同学社，54頁.
42）前掲書９）PP.655-656（Volume Ⅰ）.
43）前掲書９）P.696（Volume Ⅹ）.
44）前掲書１）142-145頁.

参考辞書・参考 URL

ステッドマン医学大辞典編集委員会（2008）『ステッドマン医学大辞典』メジカルビュー社.
Simpson, J. A. et al.（1998）*The Oxford English Dictionary,* 2nd edition, Oxford University Press.
水谷智洋編（2011）『羅和辞典』研究社.
小西友七，安井稔他編（1999）『ランダムハウス英和大辞典　第２版』小学館.
大槻真一郎（2006）『語源辞典　ラテン語篇』同学社.
荒木一雄，太田 朗他（1982）『新英語学辞典』研究社.
Online Etymology Dictionary 〈http://www.etymonline.com〉[2013, December 10]